

者米谷の生業複合体からみた 市場メカニズムの生起

Creation of a Market Mechanism
in View of the Livelihood Complex in Zhemigu

西谷 大

NISHITANI Masaru

はじめに

①問題の所在

②者米谷の生業システム

③考察—他地域との比較—

まとめ

【論文要旨】

本稿では者米谷の生業システムは、生業複合体を編み出していることに特質がある。本稿では者米谷以外の地域の実例を参考にしながら、人が日常的に生態的な環境を利用するなかで、どのような条件が整うと生業戦略に差異性が発生し市場メカニズムが生起するのかを推論する。

者米谷では生態的な環境の差異、環境利用の差異、そして生業戦略の差異という3つの差異性と、市システムが絡み合いながら生業複合体を形成してきた。者米谷における生業複合体は市システムによってささえられ、相互に影響しあうことで促進されてきた。

生業の差異性と交換が市システムを生み出す過程はけっして意識的におこなわれたのではない。者米谷の生態的な環境の差異性を各民族が利用するそのはじまりが、または特定の生態的な環境の選択と占有が、差異を生み出す市場メカニズムというシステムを宿していた。したがって不平等あるいは階層分化は、生態的な環境の差異性とともにあったといえる。つまり者米谷にみいだされた利潤を生み出す市場メカニズムは、外在的な影響によって生起したのではなく、人びとがこの谷に住み利用しはじめたその時点で、その生起の要因がすでに生態的な環境の差異性のなかに埋め込まれていたといえる。

【キーワード】 生業戦略、生業複合体、市システム、差異の論理、市場メカニズム

はじめに

中国雲南省の南でヴェトナムと国境を接する金平県の者米谷をとりあげ、これまでこの谷の生業システムを、灌漑システム、土地利用、6日ごとの定期市などから明らかにしてきた。その結果、者米谷の人びとは日常的に生態的な環境を利用するなかで生業戦略の多様性を創出し、谷全体の生業システムの特徴が生業複合体にあったことを指摘した。

本稿では、者米谷以外の地域の実例を参考にしながら、者米谷が編み出した生業複合体のもつ普遍性について論じつつ、谷の生活世界から市場メカニズムがどのように生起するかを考えてみたい。

①……………問題の所在

者米谷の生業を、これまで6つの村の灌漑システムをとりあげ、それが生態的な環境の差異と生業戦略に原因があることを明らかにしてきた〔西谷2006a, 2007a, 2007c, 2008b〕。次に、各村の灌漑システムの相違から抽出した相違を、土地利用と斜面畑の利用、さらには水田漁撈といった生業を重ねあわせることで、それぞれの村がどのような生業戦略を編み出しているのかを検討した〔西谷2006c, 2008a〕。そして金平県で6日ごとに開催される定期市のシステムと成立する要件を明らかにしつつ、地域の生活世界と市との関係性について検討してきた〔西谷2005b, 2005c, 2006b, 2007b〕。

者米谷の生業システムは、生業複合体を編み出していることに特徴がある。本稿では者米谷以外の地域の実例を参考にしながら、人が日常的に生態的な環境を利用するなかで、どのような条件が整うと生業戦略に差異性が発生し市場メカニズムが生起するのかを推論するのだが、その前に問題点を整理しておきたい。

今、者米谷では自然環境と生業の急激な変貌を目にすることができ、とりかえしのつかない変化を身近に感じ取ることができる。農民たちは金儲けに走り、利潤を追求している。その姿はまさに近代的な農民そのものであり、それに伴って彼らのいわゆる伝統的な生業の姿も急激に変容している。

こうした急激な変貌の原因を中国の開放政策による市場経済化や、世界的な潮流である資本主義経済のグローバル化と、それに伴う市場メカニズムの中国辺境地域への波及だと理解することはけっして間違っていないだろう。また者米谷の生業は、市場経済の影響を受ける以前は自然とともに生きてきた自然埋没型だったのだが、市場化の影響によって自然開発型へとかわりつつあり、今の生業変容を金銭的な利潤を追求しはじめた過程なのだという見方も十分に可能であろう。

しかし本稿は者米谷の生活世界を「中央」と「辺境」、「都市」と「農村」、そして「自然と共生する人びと」と「自然を開発する人びと」といった二項対立的な理解によって叙述することを目的としているのではない。問題にしたいのは、人びとが環境を利用するというごく日常的な行為のなかから、意識することなしに市場メカニズムが生起するのではないかという仮説を、者米谷における生活世界のシステムの具体的な姿と、その変容過程を明らかにしつつ検証してみたい。つまりな

ぜ市場メカニズムが生起するのかを考えてみたいのである。

市場メカニズムとはいったい何なのかという根本的な問いは、過去の人類社会の歴史における、都市の発生と都市と農村の関係性、交易のもたらす社会と経済への影響と文化変容、さらに国家の誕生など、あらゆる場面と深く関わってくる。しかしこれまで市場メカニズムが環境利用のなかから生起してくるという視点は、それほど明確に語られてこなかったように思われる。

また「自然保護」「環境保存」「持続的農業」が叫ばれて久しい。確かに環境破壊は市場経済が進展する過程から発生してきた。しかし市場経済が環境利用に与える悪影響は強調されてきたが、人が環境を利用する過程から市場メカニズムが生起するという、この両者の関係性を知ることについてはそれほど積極的ではなかった。環境利用と市場メカニズムの生起の関係性を問い直すことは、現在の世界が直面する環境問題がなぜ発生するのかという問題について新たな視点を提供できるのではないかと考えられる。

人の生態的な環境利用と市場メカニズムの関係性に通底する、地域や時代を超えた原理をまず知ることが、けっきょく人とはいったい何なのかという根本的な問いにもつながるのではないだろうか。さらには人類の過去の歴史における農耕の起源や、都市や国家の発生といったさまざまな問題への新たな視点の提示や、環境問題に関していえば未来志向へとつながるのではないかと思うのである。

者米谷は地政学的には中国という巨大な国家の辺境に位置する。そして山と谷がおりなす複雑な地形であり、8つの少数民族と1つの集団が暮らす多民族地帯である。それぞれの民族は言葉や習慣が異なるだけでなく、利用する土地の生態的な環境と生業戦略が異なっている。者米谷の特質は生態的な環境も複雑で、その上に多くの民族が居住することで1つの生活世界が成りたっているのだが、特に新中国成立以降は国家と市場経済の影響を強く受けてきた。こうしたさまざまな要素をひきずりながら、そこに各民族・村、そして個人単位での生業戦略が絡まって市場メカニズムを基礎とした多様な生活世界を作りあげている。

これまで者米谷の環境利用と市場メカニズムの関係性について、各民族・村単位の生業戦略と市の事実の積み重ねと総合的な理解から議論してきた。本稿では、市場メカニズムを生態的な環境利用とは別個に発生したシステムと考えるのではなく、1つの地域の生計維持システムをささえるための、大きなエスノ・サイエンスの領分の1つだととらえてみたい。人は環境を利用して生きてきた。市場メカニズムも人が作り出してきたならば、それが生起する過程も人が生態的な環境を利用する、生活世界から読み取ることができるのではないかという思考と試みである。

②……………者米谷の生業システム

者米谷の生態的な環境は、各民族・村によってそれぞれに異なっている。すなわち、①上新寨(タイ族)が定住する海拔およそ500~800mの河谷平野で、緩斜面の面積が広く水量が豊かな地域、②者米河南側のハニ族が定住する海拔およそ500~1,000mで、低い尾根筋が広がり緩斜面の面積が広く水量が豊富な地域、③者米河の北側で高寨(ハニ族)が定住する海拔およそ600~1,300mの者米河沿いから尾根筋で、緩斜面の面積は狭く利用できる水には限りがある地域、④者米河北側の

アールー族が定住する海拔およそ600~1,300mの尾根筋で、緩斜面の面積が狭く水田に利用できる水には限りがある地域、⑤者米河南側のヤオ族が定住する海拔およそ800~2,000mで尾根筋が複雑に錯綜し急斜面と森林が広がる地域、⑥クーツォン（老白寨）族が定住する海拔およそ1,000~2,000mで尾根筋が複雑に錯綜しかつては森林が広がっていた、6つの地域である〔西谷2006a, 2006c, 2007a, 2007c, 2008a, 2008b〕。

そして者米谷の生業変化を時代ごとにみると、1970年代以前、生産請負制がはじまり換金作物が盛んに導入される1980年代~2003年、さらに換金作物の進展が進む2004年以降という、3つの画期に分けることができる（図1、図2、図3）。

上新寨（タイ族）の生業も3つの画期によって大きく変化する。しかし生業戦略に通底する特質は、河谷平野という特定の生態的な環境を選択、もしくは占有することで、海拔およそ800m以下の緩斜面の土地と豊富な水を利用して水田稲作に特化しつつ、野菜栽培といった生業の一部を放棄する点にある。

牛籠（ハニ族）の生業戦略の基本は、上新寨と同様に耕作地が海拔およそ800m以下にあるという有利な条件をいかし、水田稲作に中心をおきつつ、斜面畑で換金作物を栽培するという生業戦略をとってきたことにある。一方、牛籠と同様にハニ族の村である高寨は、画期によって栽培する作物の種類は異なるのだが、水田稲作よりもむしろ斜面畑に生業の中心をおいた生業戦略をとってきた。

カービエン（アールー族）では、棚田の規模やその灌漑システムの精緻さと複雑さから水田稲作が中心であるかのようにみえる。しかし生業の重点は、水田稲作ではなく斜面畑におく。斜面畑に生業の中心をおく高寨との相違は、土地利用の開発が進むことで水源涵養林が存在しないことと、斜面畑で野菜を盛んに栽培し、それを者米の定期市で他の民族に販売することで市での野菜販売をほぼ独占してきたことである。

梁子寨瑤二隊（ヤオ族）の周辺は樹林の面積が広く、大冷山と西隆山の周辺には、植物群落タイプV・VIの原生林が残り、1990年代まで焼畑、水田、狩猟採集といった生業を複合的におこなってきた。また彼らは、者米谷に移り住んだ1920年代から森林で藍の栽培をおこなっており、それは1990年代まで続いた。1990年代に入ってから、藍の栽培と並行して草果の栽培を開始する。草果は、森林内でしかも海拔およそ1,500~2,000mの山地で栽培するのだが、これが現在の主要な換金作物となっている。彼らの生業は水田稲作や斜面畑といったある特定の生業に特化するのではなく、生態的な環境を網羅的に利用しつつ森林利用に卓越してきた点に特徴がある。

老白寨（クーツォン族）の生業は、1990年代以前まで焼畑と野生動物狩猟が中心だった。村の周囲の森林は残しつつ、彼らが使用している谷全体を一度ほぼ全面に焼き尽くし、そのなかの一部の土地を毎年焼いて畑にし、陸稲、トウモロコシ、キャッサバを栽培しこれが主要な食料になってきた。そしてその収穫の不安定さを補うために野生動物を狩猟し者米の市で売るか、他の民族の村に直接出向き、コメ、服、鉄製品との交換をおこなっていた。1990年代以降は、焼畑と動物狩猟はほとんどおこなわず、草果栽培とヴェトナムで商品を仕入れて市で売る交易が中心になっている。

生業戦略に差異が生じる要因に、まず利用する土地の高低差があげられる。海拔およそ800m以下ではコメの二期作、パラゴムの木、バナナの栽培が可能になるとともに、利用できる水量が豊富

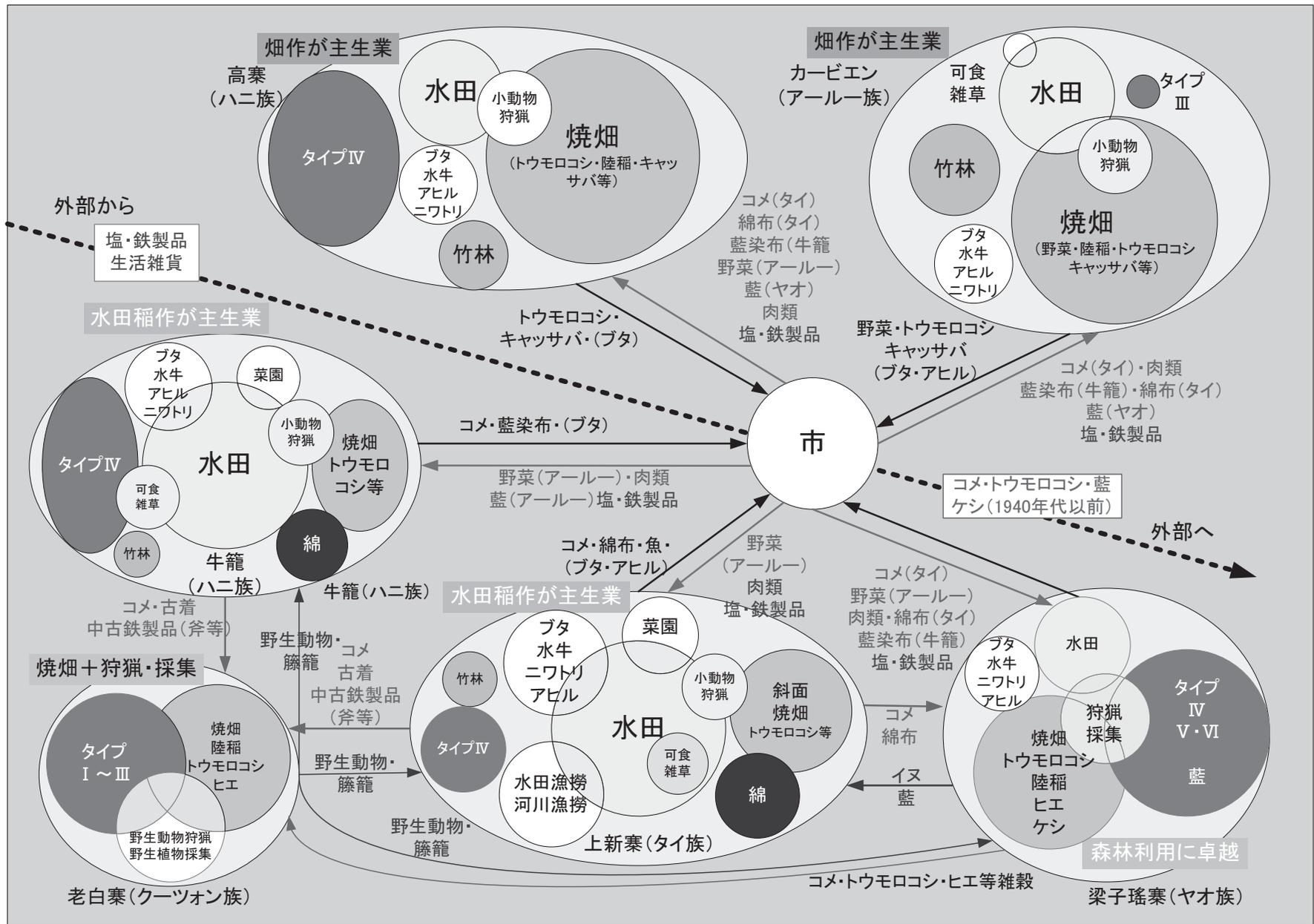


図1 1970年代以前の生業と市の関係

「唐米谷の生業複合体からみた市場メカニズムの生起」……西谷大

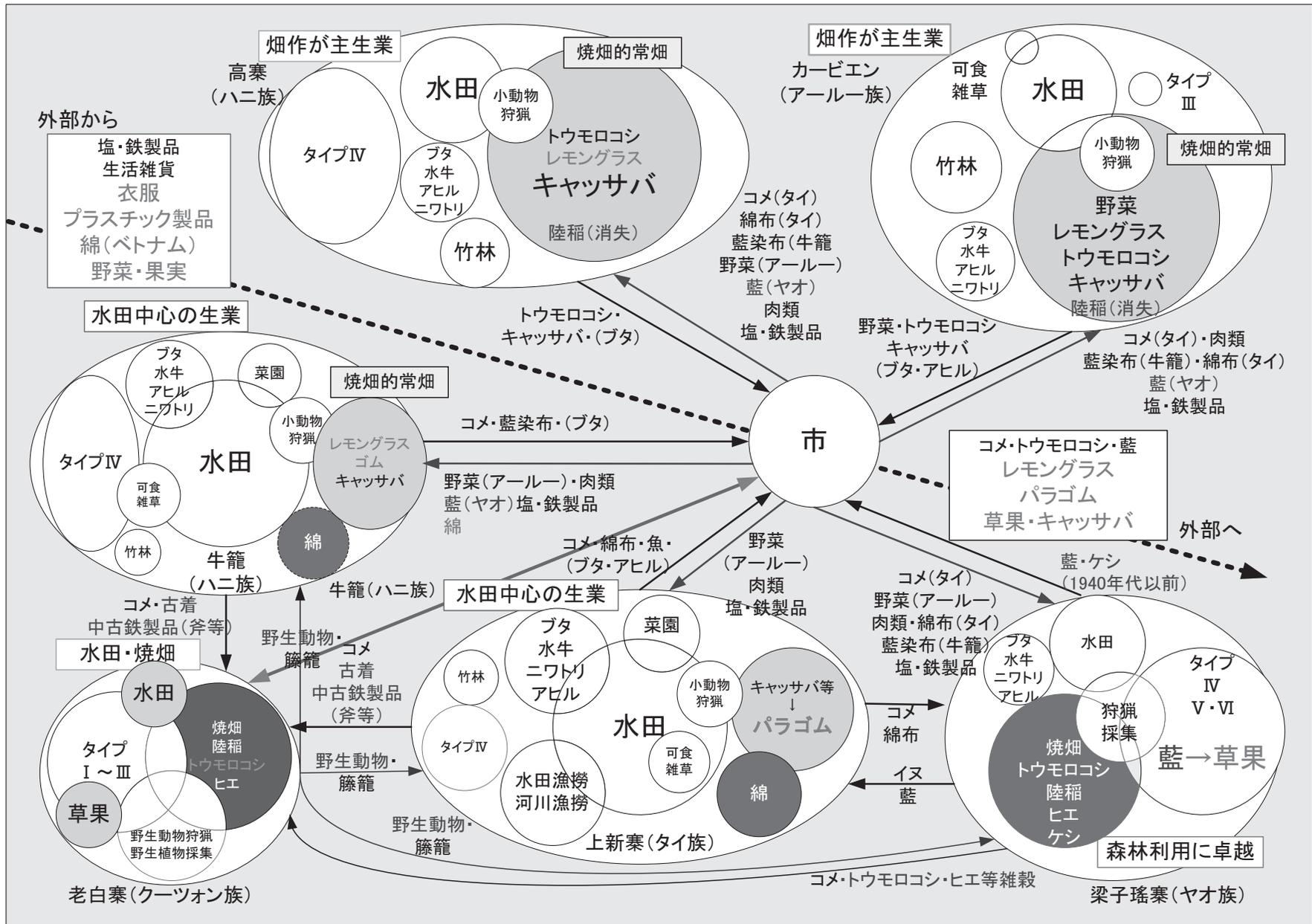


図2 1980年代～2003年以前の生業と市の関係 (■が消滅した生業 ■が加わった生業)

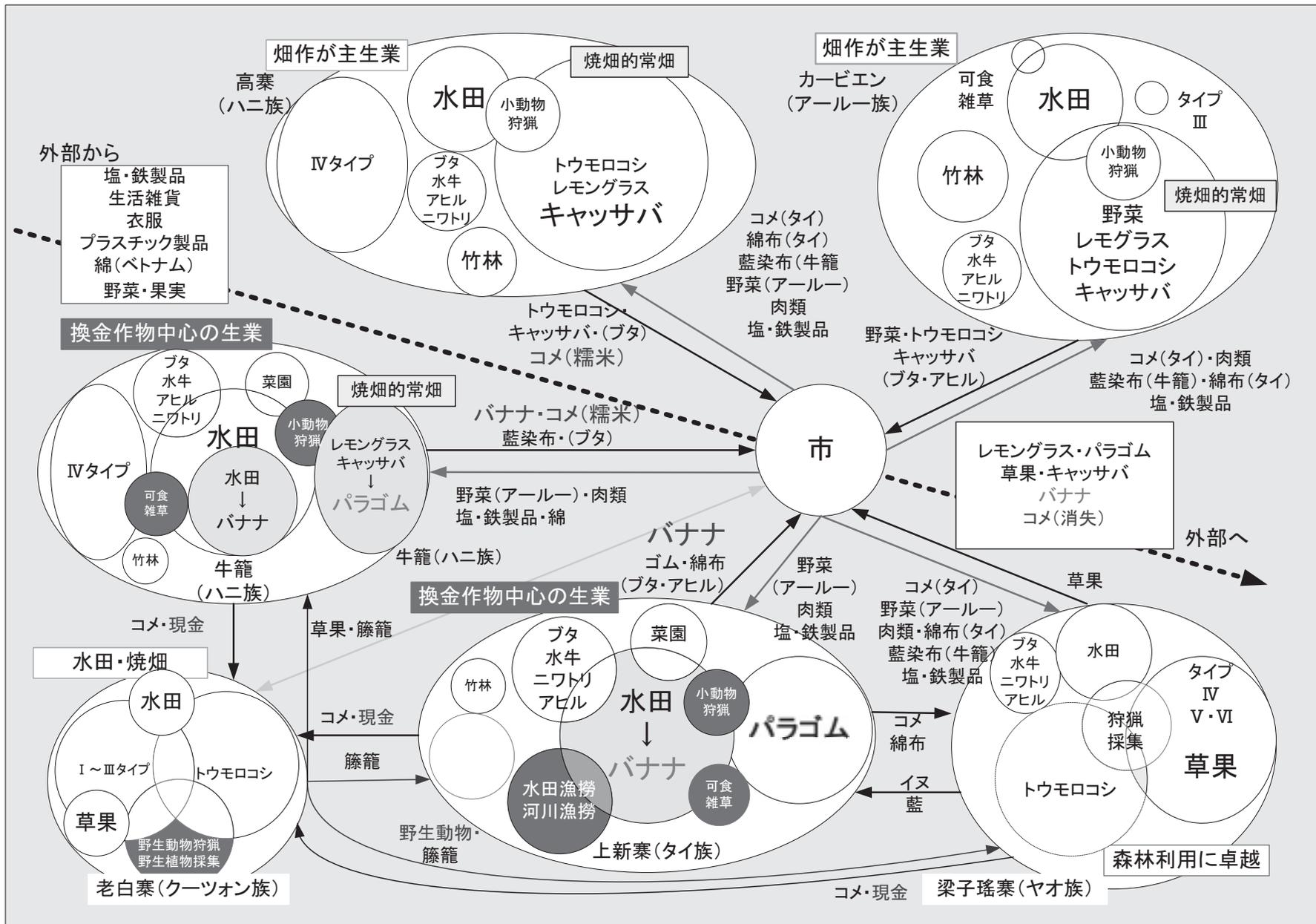


図3 2004年以降の市と生業の関係(■が消滅した生業 ■が加わった生業)

[潘米谷の生業複合体からみた市場メカニズムの生起]……西谷大

である。各民族・村の生業戦略は、海拔およそ800m以下の土地を占有できるかどうかによって大きく左右される。さらに者米河の北側は南側よりも、尾根筋に幅があり緩斜面の面積が広く斜面畑の利用に適している。そして者米河の南側では、山地が広がる地形を利用して、海拔およそ1,500～2,000mの森林内では草果の栽培が可能になる。各民族・村が利用する自然環境には、それぞれに海拔の高低差による気温、地形、水、植生といった差異性が存在する。そして各民族・村は、その自然環境に適合的であるとともに独自の生業戦略を編み出している。

つまり者米谷では、同じような生業をおこなう村が均質的に展開しているのではなく、各民族・村が者米谷の多様な生態的な環境を特定の、選択的に利用または占有することで、生業戦略に差異性が創出されている。いいかえれば各民族・村ごとに利用する生態的な環境の差異性を、生業戦略の差異性に転化しているといえるだろう。しかもそれだけではなく、者米谷は、比較的狭い範囲のなかで多様な生業戦略が集合し相互に補完しあうことで生業複合体を形成している。さらに各民族・村の生業戦略は、市を介することでその差異化が促進されるとともに、生業複合体はより強固で緊密なシステムに進展してきた〔西谷2005b, 2005c, 2006b, 2007b〕。

市を成立させている要件の一つである「生産物の現金化と生活必需品の購入」とは、市周辺の村民が定期市を利用して生産物を販売し、その収入で生活必需品などを購入することである。例えば者米の場合だと、アールー族は野菜を、タイ族はブタ肉、白い木綿布、輸入した野菜・果実を、ヤオ族は藍・草果、ハニ族は藍染めの木綿布を、クーツオン族は籐籠・野生動物と、各村・民族ごとに定期市で販売する商品に差異性があった。各民族・村は同じ生産物を持ちよって売り買いしているのではなく、意識的に差異性を創出しそれを交換に結びつけてきた。さらに「生産物の処理の自由度と技術の分担による製品の分業創出」は、市という場は交易が始まると自然発生的な分業体制というシステムを生起させる機能を持ち、商品の差異が創出されていく。この分業体制は、各民族が得意な技術を所与のものとして有していたために発生したというよりも、市という場で交易がおこなわれ、相互に得意分野を認識することで、差異性を強化しながら創出されたことに特徴がある。つまり市には「差異性の認識による分業創出機能」が埋め込まれている。反対に市を利用し生産物を売る側の立場にたてば、商品の差異性を創出することが絶対的に必要になる。

また移動商人側からみれば、村民の「徒歩移動における限界性」は、移動商人が活躍する場を作り出しているのだが、彼らは者米谷では生産されない商品を輸入し、その商品の種類の差、価格の差、そして市日の差を利用しながら利潤をあげている。定期市のもつ特徴である「小商いの集合による商品数の創出と多様な選択性」は、各露店の品揃えの商品数は少ないのだが、それぞれの露店は、他の店が販売していない種類の商品を品揃えすることで差異化をはかる。さらに市全体としては差異が集積することによって、網羅的に商品を取りそろえることができる。そして定期市は「定期市と常設店との差別化」と「売買関係の特化」といった新たな機能を創出することで、都市のなかでの存続を可能にする。

金平県の市システムを生業経済の定期市と市場経済の定期市という概念で2つのカテゴリーに分類することも可能である。しかし者米谷の生活世界は、民族・村単位で生業が相互に補完しあう生業複合体によってささえられており、それを可能にしたのが定期市である。その定期市の本質とは、生計を維持するためのシステムなのだが、生産物を交換し利潤をあげるという市場メカニズムが機

能する場にほかならない。そして交換が成立するためには、モノに差異性を創出することが必須の条件となる。

例えばタイ族は市を介することで、コメを戦略的に利用して水田稲作に集約化し、その上で他の生業が水田稲作に内部化した戦略をとることが可能になった。アールー族が斜面畑に特化できたのは、市を介した野菜販売という手段を編み出したからである。またヤオ族は森林利用に卓越し、生態的な環境を網羅的に利用する自然埋没型の生業戦略なのだが、それは市を介して藍や草果とコメ・野菜などと交換できたために可能になったのだといえる。

各民族・村単位での生業戦略を個別にみると、生態的な環境と共生した生業戦略をとっている。しかし者米谷の各民族・村の生業戦略と市が作る生業複合体とは、人が生態環境の差異を生業の差異に転化し、生業の差異から生産物の差異を生み出し、市を介することで交換し、そこから利潤を生み出す市場メカニズムにほかならない。そして生業経済の定期市も市場経済の定期市も、けっきょくのところは農民も商人の側も差異性を利用して利潤をあげている場という点では変わらない。

では者米谷の市場メカニズムの生起は何が契機だったのだろうか。ポランニーによれば、産業資本主義を代表する市場原理によって経済が決定され、利潤を生み出す市場経済は18世紀以降に出現した特殊なものであるという[ポランニー1980]。古代、原始において、人びとの物質的要求を満たすために必要な財やサービスは、貨幣を媒介とした市場交換ではなく、互酬性の原理にもとづく贈与の交換、専制的な権力による再分配の機構によって配分される。それを「実体経済」と名づけるのだが、それは自ら物質的要求を満たす手段を獲得するために、人間が自分の労働を通して自然や他の人間に働きかける、人間と自然、あるいは人間と人間の交換過程のことであるという。「人間は他のあらゆる生き物と同様、自分を維持する自然環境なしには瞬時たりとも存続できないという基本的事実をさし示すもの」であり、彼が原始貨幣や古代貨幣を用いている社会でみいだしたのは、まさにこの実体的な意味でしか把握しえない経済活動だという。

この「実体的な経済」をささえているのは、利潤や効用を追求する個人の目的合理的な行動ではなく、互酬性の原理や再分配の機構を、呪術的、宗教的、儀式的、威信の、政治的に動機づけているさまざまな形態の社会的な制度であり、価格の変動がもたらす需給法則的作用によって「ただ市場のみによって統御され、調整され、支配される経済システムである」市場経済とは逆に、これらの原始社会や古代社会においては、経済はいわば「社会のなかに埋め込まれている」と述べる。そして「他方において、供給・需要・価格システム（市場）は、特定の構造をもった比較的現代的なシステムであって、それは確立することも維持することも容易ではない」と主張する。

者米谷の市場メカニズムがどのように生起したかについては、いくつかの仮説を設定できるだろう。第1に、18世紀以降にヨーロッパ文明に起源する資本主義経済がいき着いた社会経済システムの影響のもとに出現したという見方である。第2に、1980年代以降の中国政府の市場開放政策の影響を受けて、新たに生起した可能性である。第3に、雲南はおよそ2000年前に漢という巨大国家が成立して以降、常に中国の周辺に位置し、その強烈な影響を受けてきた地域である。漢代には中原の都市ですでに常設の市が存在していた。また、雲南の定期市の歴史をたどれば少なくとも元代には、存在していた。市システム自体も雲南という少数民族地帯に内在的に生起したもので

はなく、中国的な市場の影響下に発生する要因があるという考え方である。以上の点を考慮にいれつつ考えておく必要があるのは、者米谷では過去において、ポランニーが主張する「社会のなかに埋め込まれた経済」といった段階があり、それがあつた時代に現在の市場メカニズムの段階へと移行したのかという問題であろう。

吉沢英成は、ポランニーが非市場社会、市場社会の両方を含めたさまざまな経済社会体制を比較し位置づけることのできる一般的な理論的枠組みを築こうとしたことには高い評価を与えている〔吉沢1981〕。その反面、ポランニーの主張は、利己心に対して利他心、交換に対して互酬、社会から自立する経済に対して社会に埋め込まれた経済と、反市場メンタリティーに強くいざられており、最大の問題は、けっきょくは市場メカニズムだけはその起源を突きとめないで終わっていることだという。

岩井克人によれば、人類の歴史とともに古いという意味で「ノアの洪水以前」の商人資本主義、そして産業革命以降の産業資本主義、さらに現在のポスト産業主義のいずれも、名前は違っても差異から利潤が生み出されているという「差異の原理」こそ、資本主義そのものを規定しており、資本主義という利潤を生み出す市場メカニズムの「普遍的」な原理にほかならないと主張する〔岩井1985, 1987, 1993, 1997, 2000, 2006〕。

商人資本主義の場合は、2つの地域間に生じる商品の交換比率の差異を媒介することによって利潤を得る。それに対して、ポスト産業資本主義においては、企業間の情報の差異性を媒介したり、さらには差異性そのものでしかない情報自体を商品化することによって差異そのものを商品化し、差異を意識的に創造することによって利潤を得ている。そしてその間にあつた産業資本主義は、一国経済のなかに市場化された都市と市場化されていない農村が共存していることによって、実質賃金率と労働生産性の2つの交換比率が共存し、資本家はこの2つの比率の間を往き来し比率の間に差異があれば、それを媒介することによって莫大な利潤を得てきた。けっきょくは差異から生み出されてくるという意味において、商人資本主義的な利潤やポスト産業資本主義的な利潤と原理的にはなんら異なるものではないというのである。

者米谷では、生態的な環境の差異、環境利用の差異、そして生業戦略の差異という3つの差異性と、市システムが絡み合いながら生業複合体が形成されてきた。そして生業複合体は、村単位の自給自足的な生活世界を超えた市場メカニズムによってささえられている。つまり岩井克人のいう差異の原理が強く働いているようにみえる。者米谷の市場メカニズムの基本は、各民族・村が生態的な環境の差異を、差異のある生産物＝商品に転化するという生業戦略にある。

者米谷の編み出した生業複合体のもつシステムとしての特質と、生業戦略の差異性はどのようにして誕生したのか、それを明らかにすることが者米谷において市場メカニズムがどのように生じ、なぜ者米谷では市場メカニズムが適合的だったかを知る手がかりになるように思える。

③……………考察—他地域との比較—

1 相互依存と相互補完の生業戦略—アンデス高地を事例として—

者米谷における生業複合体と市場メカニズムの生起と適合性を考える上で、者米谷以外の事例を参考にしながら、生態的な環境と生業戦略の関係性について考えてみたいと思う。生態的な環境の多様性や差異性に対応し、人間側がそれを生業の差異性に結びつけ生業戦略を編み出すことは、何も者米谷に限った特殊な事例ではない。生態的な環境が多様であれば、それを複合的に開発し生業戦略の多様性が創出されるのは、むしろ一般的だといえる。

者米谷では自然的な環境利用の高度差が、生業戦略の差異を生み出す重要な要因の1つになっていた。大きな高度差を利用して生業をおこなっている事例としては、アンデス高地があげられるだろう。山本紀夫は、アンデス高地に成立した山岳文明が、ジャガイモなどの根菜類を中心にした農耕にささえられていたとする独創的な農耕文化論を展開してきた [山本 1988, 1992, 1998, 2004, 2007]。その根拠と発想の原点は、かつてインカ帝国の中心地であったペルー・クスコ地方でも、地理的に隔絶されアクセスの容易でない辺境地帯に位置するケチュア民族の集落マルカパタ村で、およそ合計3年間にわたる住み込みを中心としたフィールド調査によっている [山本 1980]。

マルカパタ村でおこなわれていた生業の特徴は、核家族がおよそ3,000mにおよぶ大きな高度差を利用してジャガイモやトウモロコシを栽培し、さらに農耕のできない寒冷地でも家畜を飼って自給自足的な暮らしを達成していたことにある。しかもジャガイモ栽培だけで3つの高度の異なる環境区分を利用し、年に4回もジャガイモを収穫する。

また稲森哲也によれば、アンデス高地のように熱帯高地という環境は、比較的狭い空間のなかに多様な作物ゾーンをもっていることに特徴があるという [稲森 2007]。そしてアンデスの西斜面では、プナ（高原）とケブラーダ（峡谷）とに対応して、牧畜地域と農耕地域とが明確に区分されながら、しかも隣接している。そのため農耕と牧畜の結びつきが強く、しかも安定している。一方、アンデス東斜面のように湿潤で生態系が連続してつながっているところでは、農耕と牧畜が結びついた農牧複合の形態が容易に発達したと考えられる。そして東斜面では農牧でも牧畜は定住的な特徴をもっている。農牧民はプナに主な居住地をもち、そこから農作業のために谷を下る。すなわち農耕の方がトランスヒューマンス（季節的上下移動）の要因になっているというのである。

ではなぜこのように、多様な生態的な環境を網羅的に使う必要があったのだろうか。山本紀夫によると、「中央アンデス高地は低緯度地帯に位置しているため気候は比較的温暖であるが、そこが農業をおこなう上でけっして適しているわけではないことである。むしろ、農耕限界に近い標高4000メートル前後の高地は農業をおこなう上で極限状態にあるといっても過言ではない。このような環境や状況のなかで農業をおこなうためには、大きな生産性を目的とするよりも、安定的な生産性を求める必要がある。不作の影響は危機的な状況を当該社会にもたらすと考えられるからである」という [山本 2007]。つまり「何重にもはりめぐらされたりリスク分散システムがめざしているのは利益の極大化ではなく、被害の最小化である」というのである。

者米谷では、比較的限られた地域に多民族が暮らし、しかもそれぞれに異なる生業戦略を営みながら生業複合体を形成し、相互に生産物を補完してきた。そのことは実は、多様な生態的な環境を分散して利用することになり、多様な種類の生産物を産出することと同様の効果をもたらす。そして市システムによって、民族の異なる村の間でのモノの交換が容易におこなわれてきた。つまり民族の異なる村の間では、共同体的な原理にもとづく互酬等による交換方法に頼る必要がなかった。生業複合体と市システムの相互の関係性が、実は収穫の危険を分散するリスク回避の役目もはたしてきた側面もあるのではないかと推測できる。

大貫良夫は、アンデスで特徴的な大きな高度差を利用した生業についての研究を端的にまとめている [大貫1978]。それによると Murra は、⁽¹⁾ スペインの植民地強化政策のために16世紀におこなった実地踏査の記録を分析し、当時の人びとがアンデスの多様な環境をどのように利用していたのか、その方法を明らかにした。アンデス住民が高度によって異なるいくつかの環境（生態学的階床）を利用して、その集団のなかで自給を達成していたのだが、それをアンデス住民は「異なる生態学的階床を同時に最大限に利用」することで生産物の補完体系を作りあげていたのであった。このようなシステムを Murra は「垂直統御」と呼んだ。

さらに Burash は、アンデス耕地の環境利用に (1) 圧縮型、(2) 列島型、(3) 拡散型、の3つのタイプを設定した。第1の圧縮型は土地の傾斜が急で、自然区分帯が連続的に分布するところで見られるタイプである。自然区分の端から端までが徒歩で2~3日の距離である。したがって村人は常に上下に動きながら、高度差を利用して生産活動に従事している。

第2の列島型は、Murra が民族学史的な資料から明らかにしたインカ時代から16世紀にかけてのルパカ族やチュパ族にみられたタイプである。それは、例えばルパカ族でいうと、ティティカカ湖畔に主居住地をもちながら、太平洋岸にもトウモロコシの耕作地をもつというように、利用する土地が遠くはなればなれになっていて、それを利用するためには本村をある程度留守にすることが必要になってくるものである。

第3の拡散型は、クスコ県のビルカノタ谷のような広い谷間で、点在する集落の間で分業をおこない、複雑な交換の網を通して、産物が谷間全体にゆきわたるものである。大貫は、これに專業型の追加を提唱した。それは異なるエスニック・グループが、それぞれ異なる環境を専門的に開発し、産物を交換しあうタイプだという。拡散型においても、異なる環境の産物を交換することはみられるが、それはひとつの谷を占める同一エスニック・グループ間で成立するものであり、その点で專業型とは違うとする。

そして環境利用の相互の関係性は歴史的にみて、「アンデス高地では、世帯ごとに自給自足できる経営を営もうとして、圧縮型の環境開発が基本にあった。……何らかの事情で世帯単位の自給ができない場合は、コミュニティ単位あるいはエスニック・グループ単位の自給自足が求められ、そこには圧縮型、列島型、拡散型の諸類型が成立する。どの形をとるかは、それぞれの地方、民族、集落などの地方的事情による。さらにそれすら不可能な場合、異なる環境を異民族が棲み分け、相互に交換をおこなう專業型がとられる」という歴史的な変遷をたどったのではないかと類推する [大貫1978]。

山本紀夫もマルカパタ村の調査から、各世帯は領域内の比較的狭い範囲内に多様な環境を有して

おり、この高度差を利用することにより世帯レベルで農業と牧畜をともにおこなった自給自足が可能であると述べる [山本1980]。しかし、それはある程度の規模を超すと世帯レベルではおこなえなくなり、農業専業や牧畜専業などのように環境の一部を利用するタイプへと移行するのではないかと推測する。世帯レベルで自給自足体制が確保できなくなったとき、それは集落のレベルで自給自足体制をとろうとするのではないかというのである。ただいかなる事情によって世帯単位の自給自足体制が崩れるのか、その場合はある特定の類型を採用するのはいかなる理由によっているのかは不明であるという。

つまり生業形態は生態的な環境の影響を受けつつも、環境利用の諸類型だけで理解することは難しいということだろう。また生業形態は社会の構造、規模、歴史や、さらにはそれらの相互の関係性やそれをとりまくさまざまな要素によって変容していくと思われる。

者米谷の各民族・村を世帯単位でみると、多様な生態的な環境を網羅的に利用している。しかし各民族・村単位でみると、棲み分けと生業に明確な差異があり、しかも自給自足の生業形態をとっていない。むしろ者米谷という地域単位での自給自足体制を、生業複合体という生業形態によって維持してきたことに特徴がある。その成立背景には、アンデスの場合にみられる内的な生業変容に主要な要因があるというよりも、むしろ民族単位で者米谷への移住がおこなわれた歴史と深く関係しているのではないだろうか。

文献史料は残されていないため村での聞き取りによる、およその歴史的な変遷しかたどれないが、者米谷で最初に居住をはじめたのがハニ族ではないかと推測している⁽²⁾。

おそらく各世帯は、者米河から山の斜面にかけた多様な環境を有し、高度差を利用することで複合的な生業をおこなっていたのだろう。

そこにタイ族が移住し、最も水田に適した河谷平野沿いを占拠したのではないと思われる。次にアールー族が移住してきた。河谷平野やその北側斜面は、タイ、ハニ族に占有されていたため、それより条件の不利な尾根筋に定住したと考えられる。そしてヤオ族が20世紀はじめに、他の民族が利用していなかった者米谷の南側に移住してきた。クーツォン族が1930年代にヴェトナム方面から北上し、者米谷の南側でも山麓斜面に居住するようになり、現在みられる棲み分けができあがった。

これまで繰り返し述べてきたように、者米谷では各民族・村で、生態的な環境の利用に差異があり、村単位で自給自足体制をとっているのではない。海拔およそ800mまでの水が豊富で緩斜面が広がる河谷平野を占有することは、コメの二期作だけでなく、綿の生産、パラゴムの木、バナナの栽培も可能になる。反対に海拔およそ800m以上の土地しか利用できない村では、常にコメは不足状態であり換金作物の種類も限定される。つまり河谷平野を占有することは、他の村に対して生業戦略上、決定的に優位な立場にたつことになるだけでなく、環境利用と生業戦略の差異を生み出し推進させる要因になる。

河谷平野のコメ、木綿と、山住の民族の野菜、藍、野生動物、野生有用植物などが交換されてきたのだが、山住の民族側からみれば、河谷平野とは差異のある商品を生産すればコメや木綿が手に入る。つまり河谷平野のコメ・木綿という余剰価値を手に入れるためには、河谷平野が求める商品、つまり価値の差異を創出しなくてはならない。

また河川沿いは、者米谷への輸出入にとって交通路であるだけでなく、山からの人の流れと物資の流れが、東西の流れと交錯する地点でもある。河谷平野という特定の生態的な環境を選択的に利用または占有することは、交換の場と機会の独占と強化につながる。

タイ族は水田漁撈と可食水田雑草を水田に内部化し、水田に特化する生業戦略をとっているのだが、それは畑での野菜栽培など、他の生業を放棄することで成りたっている。者米谷の生業複合体は、農民の労働がコメという余剰生産物を生み出し、それが余剰価値として交換を生み出しているという単純な構造ではなく、河谷平野ではコメや木綿を余剰価値へと転化させ、反対に山住の民族・村はそれに対応した生業戦略の創出という、相互作用の上に成立しているのだといえる。

山本紀夫は、環境利用の視点からみると、アンデスの垂直統御の特徴として必ずしも生産物を補完するだけでなく、生産システムそのものを補完している重要な面をもつと述べている〔山本2007〕。同じように者米谷における生業複合体と市システムの相互作用は、各民族・村の生業システムそのものを分散し相互補完する機能がある。いわば「生産物の相互依存」と「生業システムの相互補完」が特徴だといえよう。確かに河谷平野を占有することは、山の上だけに生産地をもつ条件よりも有利になる。しかし生産物の相互依存と生業システムの相互補完は、者米谷を1つの地域としてみた場合は、ある段階までは各民族・村の生産性を一定範囲内で、平均化またはレベリングする働きがあったのではないかと思われるのである。いいかえると生業複合体と市システムは、比較的限定された地域内で、多民族の共存を可能にした要因の1つになったのではないかと考えられる。

2 農業の集約化と内部化—アフリカと日本を事例として—

もう一つの視点として、集約的農耕と非集約的農耕という観点を意識してみたい。掛谷誠は、『アフリカ農耕民研究と生態人類学』〔掛谷誠編著2002〕の序である「アフリカ農耕民研究と生態人類学」で、アフリカの農耕民を研究する上で、「農業の「粗放性」と集約性をめぐる人類史的な意味の再検討」と「集約的な在来農業の研究」の2つの視点を提示している。

その背景にあったのは、伊谷純一郎の「人類社会の進化と解明」をめざした研究のなかで、提出された「自然埋没者」と「自然開拓者」であった〔伊谷1980〕。自然埋没者とは、自然のなかに埋もれるようにして生き、生態系のなかにすっぽりはまりこんで生きている人びとである。人口密度は低く、その自然環境を大きく改変することなしに生活していける人びとである。一方、自然開拓者は自然に対抗し、自分たちの都合のよいように自然を改変して彼らの生活を構築していく人びとのことである。

こうした伊谷純一郎の直感ともいうべき発想を受けて、掛谷誠は自然埋没者であったトングウェ社会の調査を通じて、食料の生産—分配—消費をめぐる「最小生計努力」「食物平均化」という2つの基本的な傾向を発見する〔掛谷1974, 1977, 1986〕。それはホスピタリティーや互酬性・相互扶助などを通して、食物は集落内・集落間を流動して平均化する傾向性を示す。精霊や祖霊の恐れや、人びとの妬みや恨みに起因する呪いへの恐れが、背後からこれらの生計経済の基本的傾向性をささえているということを明らかにしていく。

さらに掛谷誠は北東ザンビアのベンバなど、アフリカの焼畑農耕民の調査から、先進国の「農業」

と彼らの焼畑農耕を対比させ、その生活様式まで含めて差異を明示している [掛谷 1998]。それは2つの生活様式のきわだった相違として提示されているが、アフリカのエスニック・グループの焼畑農耕を非集約農耕的生活様式とし、主として中緯度地帯の森林地帯に発達した先進国の農耕を集約生活様式とした。そして、熱帯アフリカの焼畑農耕は、そこに生きる人びとの価値観や世界観まで射程にいれるならば、集約農耕と対等な価値をもつものであると主張している (表1)。

表1 2つの生活様式 [掛谷 1998]

| 非集約的生活様式 (エクステンシブな生活様式) | 集約的生活様式 (インテンシブな生活様式) |
|-----------------------------|-----------------------------|
| 非集約的農耕 (エクステンシブな農耕) | 集約的農耕 (インテンシブな農耕) |
| 低人口密度型農耕 | 高人口密度型農耕 |
| 「労働生産性」型農耕 | 「土地生産性」型農耕 |
| 多作物型 | 単作型 |
| 移動的 | 定着的 |
| 共有的 (総有的) | 私有的 |
| 自然利用のジェネラリスト (農耕への特化が弱い) | 自然利用のスペシャリスト (農耕への特化が強い) |
| 安定性 | 拡大性 |
| 最小生計努力 (過小生計努力) | 最大生産努力 (過剰生産) |
| 平均化・レベリング | 差異化 |
| 遠心的 | 求心的 |
| 分節的 | 集権的 |

そして農業の「粗放性」と集約性をめぐる人類史的な意味を再検討する視点から編集された『アフリカ農耕民研究と生態人類学』 [掛谷誠編著 2002] では、アフリカにおける多様な集約農耕の姿がうきぼりにされている。そのなかで篠原徹は、エチオピア南部のアカシア・ウッドランド帯に分布する小山塊に住むコンソを対象として、その在来農業の集約性について論じている [篠原 2002]。

コンソ社会には長男優先相続に由来する経済的な階層性があり、また農業者と土器作り・鍛冶を生業とするもの間には明瞭な階層性が認められるという。自然的な環境や他のエスニック・グループとのコンフリクトといった影響のため、領有面積の限られた地での高人口密度型の農耕社会は、社会の階層化という内部的生活適応をはかり、他方では農耕の精緻化に向かったと指摘する。そしてコンソは集約的な農耕を営み、自然利用のスペシャリストとして農耕を極度に特化した文化をもつ人びとであることが明らかにされる。

これに対して掛谷誠は、人口だけが集約的な農耕を創出する要因にはならないのではないかと反論を加えている。またコンソにも、者米谷と同様に定期市が存在するのだが、定期市と各村の生業との関係性について不明確なことも不満が残る。

しかし重要な点は、篠原がいう「先進国からみればコンソの農業は遅れたものとして映る点である。しかしコンソの優れた農業は、機械導入や化学肥料という外部からの影響がなくても、等身大の自己開発の技術で最大限の土地生産性をあげる方式とみなすべきだろう」とコンソが自然のジェネラリストから自然のスペシャリストへの道を歩んでいることを指摘した点であろう。さらに「農耕という生産様式が、非集約的なものから集約的なものに発展してきたことはおそらく事実である

う。この両者を分かちつのは、それぞれ「条件的平等」から「社会的不平等」の敷居を跨いだことになる。しかし、コンソのさまざまな側面からみられるように、社会的不平等も一定の規矩のなかで執行されるのであって、この規矩こそがコンソの文化の固有性だといえる」と、近代的な集約農耕の影響を受けなくても、ある一定の条件の下では、集約化や階層性を創出する方向に進むことの可能性を示唆しつつ、コンソがアフリカ的な集約農耕の極致であると主張する。

さて者米谷の各民族・村の生業を、掛谷誠の「2つの生活様式」という観点でみると、各民族・村でみいだされる特徴は以下の通りである。タイ族は、「土地生産性」型農耕、単作型、定着的、私有的、自然利用のスペシャリスト（農耕への特化が強い）、拡大性、最大生産努力（過剰生産）、差異化という特徴をもつ。アールー・ハニ族もタイ族と同じ傾向をもつが、生業は斜面畑に集中し、しかも単作型ではなく多作物型という特徴をもっている。一方、ヤオ族、クーツォン族は少なくとも1970年代以前は、焼畑を中心としながら狩猟採集と森林利用を複合的にこなってきた。またクーツォン族は、狩猟・採集を中心に焼畑を組み合わせたという戦略をとっており、低人口密度型農耕、「労働生産性」型農耕、多作物型、移動的、共有的（総有的）、自然利用のジェネラリスト（農耕への特化が弱い）、安定性、最小生計努力（過小生計努力）という特徴をもつといえるだろう。

掛谷の提唱した項目のうち、「遠心的」に対して「求心的」、「分析的」に対して「集権的」については評価が難しく「生活様式」レベルの判断は下せないが、少なくとも農耕形態のレベルでは、タイ、アールー、ハニ族は総じて集約的農耕といえ、ヤオ、クーツォン族は非集約的農耕といえるだろう。つまり者米谷には、集約的な農業をおこなうタイ、アールー、ハニ族と、非集約的な農業をおこなうヤオ、クーツォン族の2つのタイプが併存していたことになる。

ここで安室知が日本の水田稲作地における研究から提唱した、「生業の並列化と内部化」という複合生業論の視点を用意し、者米谷の生業複合体について考えてみたいと思う〔安室2005〕。安室は日本の水田稲作地帯において、稲作、畑作、漁撈、採集といった生計活動が並列的に存在した段階を仮定する。しかし稲作への特化が進んでいくと、水田漁撈や水田養魚、それに水田二毛作や畦畔栽培といった他生業が、水田稲作へと内部化していったと述べる。そして日本において水田稲作に内部化された他生業の存在は、自給性を維持しながら稲作に特化するという、いわば矛盾した生計維持のあり方を可能ならしめた最大の要因であると主張する。

者米谷の各民族・村の生業を、並列化と内部化というモデルでみると、水田漁撈や畦畔の可食水田雑草採集といった他生業を水田稲作へと内部化させてきたのはタイ族である。一方、アールー族とハニ族は、こうした水田漁撈や可食水田雑草採集といった他生業を水田稲作に内部化していない。むしろ生計活動全体としてみると、畑作と水田稲作が並列化した状態にあるといえる。そしてヤオ族は、水田稲作、焼畑、森林利用（藍と草果栽培）、狩猟採集を、クーツォン族は、焼畑、狩猟採集といった生業を並列的にこなってきた。このように者米谷では生業の内部化と並列化という視点でみても、異なる生業形態のモデルが混在していたことになる。

者米谷の特徴は、市システムが各民族・村がおこなってきた非集約農業や集約的農業、または各生業の並列化と他生業の水田稲作への内部化といった、異なる生業形態を結びつけたことである。むしろ者米谷内部の各民族・村の生業を、補完関係をもつ1つのシステムへと再構成し、者米谷全体として相互に生産物を依存する生業システムを創出した点にある。

生業複合体と市システムは、異なった生業戦略のリンクや各民族・村単位での自給自足体制を支えるだけでなく、1つの地域内での生産性の安定とリスク回避を伴う生計維持機能を構築した点に特徴がある。しかもこのようなシステムは、篠原徹がコンソに「等身大の自己開発によるアフリカ的な集約農耕の極地」をみいだしたように、者米谷においても自己開発によって内発的に創出されてきた。

そして多民族が暮らす者米谷では生業複合体と、それをささえ促進させてきた市システム、つまり市場メカニズムは、多民族の共存を可能にした1つの要因になってきたのではないか。つまり市場メカニズムを、彼らの生活世界を維持する上で適切なシステムとして利用してきたといえる。

生業複合体と市システムからみた者米谷の経済は、これまでみてきたように、市川光雄のいう生業経済と市場経済という2つの段階があるようだ[市川1997]。市川のいう生業経済とは、生業経済＝生計のための経済である。それに対して市場経済とは、市場での交換を前提に生産と流通がおこなわれる経済であり、効率化、合理的行動を伴う。そして生業経済が市場経済へと移行すると、農業に対して「少数の商品作物が集中して生産されるようになり、生業と資源利用の特化が起こる」、「自給作物を販売するようになり、商品作物へ特化し、食料、その他の生活物資を購入するようになる」、「利潤をもとめる商業的農業では、労働力の得られる限り面積を広くとる」と3つの変化をあげている。つまり生業経済から市場経済への変化は、「社会関係の生産」から「富の生産」へ、「社会に埋め込まれた経済」から「経済の突出」が進むと主張する。

者米谷の経済は、市川のいう市場経済への方向へと向かいつつあるようにみえる。特に金平グループの市システムからみた特徴は、まさに市川のいう市場経済の段階にあるといえるだろう。しかし者米谷から抽出した生業システムの特徴は、生業複合体・市システム・市場メカニズムの関係性の上に成立している。そしてこの関係性から、「生産物の相互依存」と「生業システムの相互補完」という生業戦略を創出し、多民族の共存を可能にしてきた。

市川は、市場経済が進むと生態系に破壊的な影響を与えるため、それを緩和するためにはなんらかのバッファの存在が必要だと主張する。その例としてコンゴ（ザイール）のイトウリの森における、ムブティと農耕民との交換をあげている。ムブティが野生動物の肉による交換で農耕民から手に入れるのは、日常生活物資、すなわち使用価値だという。これがコンゴ（ザイール）の破滅的な経済的混乱のなかで、ムブティが影響を被ることがなかった要因だと主張している。

者米谷の場合は、比較的限定され多様な生態的な環境をもった地域内で、各民族・村単位で生業を並列化する生業と内部化する生業、集約的農耕と非集約的農耕といった、相反する生業形態が併存する。むしろ各民族・村がそれぞれに生業形態の差異を積極的に促進してきたといえる。しかし者米谷全体でみれば、生業複合体・市システム・市場メカニズムは、ある段階まで各民族・村の生業戦略の差異性を矛盾することなしに併存させる働きをする。この3つの関係性こそが者米谷全体の生計維持システムを安定させる、つまりバッファの働きを果たしてきたと推測できる。

ところが生業複合体と市システムが生み出す市場メカニズムは、一方で変容を急激に押し進める機能をもつ。特に者米谷でみいだされる1980年代から急激に進展した各民族の換金作物への特化は、者米谷固有の生業複合体が、条件が整えば、変容、すなわち突出した差異、つまり利潤を追い求める方向へと突き進むことを示している。

いいかえれば者米谷の市場メカニズムは、ある段階まではけっして社会から突出したものではなく、地域の生活維持システムを安定させ、バッファーとしての働きを果たす。つまり者米谷の経済の歴史は、ポランニーが主張した近代に発生した市場メカニズムとしての「市場経済」に対して、彼が古代社会にみいだした「社会に埋め込まれた経済」といった二項対立的な変遷過程としては理解しにくい。むしろ市場メカニズムの歴史的な変遷過程のなかに、「生業経済」や「社会に埋め込まれた経済」の段階が織り込まれていたといえるだろう。

3 市システムの生起と生業戦略—海南島のリー族を事例として—

海南島のリー族を事例にとりあげながら、定期市がそもそもどのような生業形態から生起する可能性が高いかを考えてみたい。海南島のリー族は、者米谷やアルカパタ村のような大きな高度差は利用していないが、やはり山と谷がおりなす多様な環境を多様に利用し、複合的な生業をおこなってきた。しかし者米谷とは異なり定期市システムをもたない。

リー族は、海南島の中央部に位置する五指山市に住んでいる〔篠原編 2004〕。五指山市の五指山郷と毛陽鎮の間には昌化江支流が流れ、それに沿って多くの村が展開する⁽³⁾。そのなかで水溝村、初保村、太平村、保力村という4つの村の調査をおこなってきた。明らかになったことは、リー族の自然利用は焼畑・水田・動物狩猟を複合的に利用してきたことに特徴がある。それをささえていたのは、生態的な環境の多様性に依存した生活適応戦略である〔篠原 2001, 西谷 2001c, 梅崎 2004, 蔣 2004, 伊藤 2004〕。彼らは自然を多面的多目的に利用し、生産性を維持しつつ環境を破壊せず、そのことが在地リスク回避にもつながってきた。

五指山地域では、五指山市やその周辺の町では常設の市は存在する。しかし1980年代から現在まで定期市は存在していなかった。初保村における村人の記憶では、1940年代以降から1960年まで、塩はおよそ70km離れた儋耳まで徒歩で、2泊3日かけて買いだしに出かけていたという。1930年代におこなわれた岡田謙、尾高邦夫、スチューベルなどの調査記録でも村に漢族の商人が住み込み、塩・鉄製品・布などと野生動物・ブタなどを交換する記録は残されているのだが定期市の記載はない〔岡 1942, 尾高 1942, スチューベル 1943〕。

また海南島は者米谷とは異なり、11世紀には蘇東坡が流刑に処せられ、彼がリー族についての記録を残すだけでなく、それ以降も漢人側からの視点ではあるが文献史料がかなり残っている〔西谷 2004c〕。それによると海岸部の町では、内陸部のリー族との交易がおこなわれた記録はあるのだが、五指山地域での定期市の記録はみあたらない。このように、五指山地域では定期市そのものが存在していなかった可能性が高い。

リー族の生業の変遷を歴史的にみると、大きく3つの画期に分けることができる〔西谷 2004c〕。第1の画期は、宋代に成立したと考えられる「生業の3重構造」である。すなわち沿岸部での水田稲作中心の生業形態、中山間地域での水田と焼畑と狩猟採集を複合的にこなう形態、そして山間部での焼畑と狩猟採集を組み合わせた形態という3つの生業形態の成立である。

第2の画期は明代であり、ブタが積極的にリー族の村でも飼養されるようになる。宋代以降の儋耳などの中山間地域において、水田、焼畑、狩猟採集という複合的生業が成立する背景には、人口圧に対処するため食糧の生産を増大する必要性があったと考えられる。このことが、集約農耕であ

る水田と非集約農耕である焼畑と狩猟採集を同時に併存させる要因だと思われる。そしてその同じベクトル上に、明代になって大陸からの屯田兵という大量の人口移動が集約農耕を促進させ、さらにリー族の村においても交易を目的としたブタ飼養が積極的に推し進められていった。

第3の画期は、19世紀終わりから20世紀にかけてである。リー族は税を徴収されるという形で、国家に吸収されてゆく。そして沿岸部からの集約農耕の波が押し寄せるなかで、さらなる変容を余儀なくされる。焼畑と狩猟採集という生業形態は消失し、海南島全体が沿岸部の水田を中心とした集約農耕と、中山間地域と山地地域での水田、焼畑、狩猟採集という複合的な生業形態という、島の「生業の2重構造」へと変容していく。

リー族の生業の特徴は、集約農耕的な水田や家畜と非集約農耕的な焼畑や狩猟採集を複合的に組み合わせてきたことに独自の生活適応戦略があったととらえることができる。その複合的な生業を生起させた根本的な要因は、中央国家のおよそ2000年間にわたる政治的・経済的、そして中国的集約農耕の影響だった。

つまり海南島という地域でみれば、沿岸部と中山間地域と山地地域とでは生業戦略に差異があるのだが、それぞれの地域内では類似した生業戦略をもった村落が均質的に展開していた可能性が高い。

その山地地域である五指山地域のリー族と者米谷との生態的な環境利用の相違点は、リー族は河谷平野沿いから、その背後に展開する谷筋と尾根筋という広い範囲を利用することである。つまり村の周囲をとりまく多様な生態的な環境を、網羅的に利用している。いかえればどの村も同じ生態的な環境を利用して、焼畑・水田・動物狩猟を複合的に利用した自給自足的な生業を営んできたのであり、隣接しあう村同士の生業の差異性が者米谷のように顕著ではなかったと考えられるのである。⁽⁴⁾

リー族にとって、コメは水田と焼畑で生産して自給するものだった。コメと商品との交換はおこなわれた。しかしそれは遠く離れた町で開催される、市場での商人を介した交換であった。村の余剰米は醸造してビャン（濁酒）にし、地域内における村同士の交換の場では、コメ＝貨幣という役割は果たしていなかった。つまり五指山地域では生態的な環境の差異を、それぞれの村が網羅的に使い、それぞれが同質で差異の少ない生業が並列的に展開してきたと考えられるのである。リー族の生業戦略は、網羅的に生態的な環境を利用するため、どの村もその利用形態や生業戦略が均質的で、そのため生産物の差異性が生まれにくく、差異を交換する場である定期市が生起しにくかった。

者米谷の市場メカニズムの生起は、けっきょくのところ生態的な環境の差異性を人間がどのように利用するかにそのきっかけがある。つまり農民が労働すれば余剰価値が生み出されるのではなく、生態的な環境の差異から生業の差異を生み出し、余剰価値へと転換する戦略が必要だということである。

いかえれば市場メカニズムは、生態的な環境の差異を、民族・村が網羅的に利用し、それぞれが均質で差異のない生業戦略が並列的に展開したのでは生起しにくい。生態的な環境のある特定の部分を、ある特定の民族・村が選択的に利用する、または占有することで差異的に利用した場合に生起しやすいということである。そして生業の差異は交換と市システムを生み出し、市の利用が進展するにつれて、それぞれに生業戦略の差異性が増幅されていく。やがては生業戦略の差異性そ

のものを意図的に創出し利潤を得る方向へと展開し、者米谷では現在みられる生業複合体=分業が形成されていったと推定できる。

まとめ

これまでの議論をまとめると、者米谷では生態的な環境の差異、環境利用の差異、そして生業戦略の差異という3つの差異性と、市システムが絡み合いながら生業複合体を形成してきた。者米谷における生業複合体は市システムによってささえられ、相互に影響しあうことで促進されてきた。

生業複合体と市システムは、各民族・村単位で生態的な環境に応じた生業戦略の創出と分業を特徴とする。それは結果として、多民族が比較的限定された地域で生活する上で、多様な種類の生産物を算出するとともに、相互に生産物を依存することになり、そのことが収穫の危険を分散するリスク回避の役目もはたしてきた側面もあると考えられる。

このことは生業複合体と市システムが、各民族・村ごとに生業システムそのものも相互に補完していたことを意味している。つまり者米谷が地域として「生産物の相互依存」と「生業システムの相互補完」という生業戦略を創出する。そして市場メカニズムのなかに「生業経済」や、または「社会に埋め込まれた経済」がシステムとして機能していたことが、比較的限定された地域で多民族の共存を可能にした1つの要因になってきた。

そして市システム=市場メカニズムは、生態的な環境のある特定の部分を、ある特定の民族・村が選択的に利用する、または占有することで差異的に利用した場合に生じやすい。そして生業複合体・市システム・市場メカニズムは、ある段階まではけっして社会から突出したものではなく、むしろ地域の住民が主体的に利用でき、地域の固有の生活維持システムを安定させ、バッファーとしての役割を果たす。ところがある段階をすぎ条件が整うと、地域の生業の変容を急激に推し進め突出した利潤を追い求める方向へと突き進む。

さてここでもう一度、者米谷において市場メカニズムがどのように生起するかという問題にたちかえり、貨幣という視点から者米谷の生業複合体を考えてみたい。人類の歴史上において貨幣として使われたものには、さまざまなものがある（金、銀、銅、鉄など鉱物、布、コメ、コムギなどの食料、綿、衣服など）。そしてコメと木綿は、1950年代以前の者米谷の市において政府発行のコインや紙幣とともに、貨幣としても使われていた。

岩井克人によれば、貨幣が貨幣として受け入れられるのは、それがモノとして商品価値をもつからだだと主張する貨幣商品説と、共同体的な申し合わせや政府の命令や国家の法律によって貨幣として指定されたからだという貨幣法制説の2つがある。しかし貨幣の本質は「予想の無限の連鎖」によって成立しているのだという〔岩井1993〕。貨幣は自分ではなく他人が将来それに価値を与えてくれるという予想の上に成り立っている。貨幣が貨幣として存続するには、この予想の連鎖は将来に向かって無限に続いていく必要があるという。つまり「予想の無限の連鎖」を可能にしてくれるモノであれば、それはどのようなモノでも貨幣になり、これが貨幣の原理なのだという。

さらに貨幣の発行には、発行する側に必ず王権利得（シニョレッジ）が発生する。王権利得とは「金銀を採掘する鉱山主、金銀を鑄造する君主、兌換紙幣あるいは不換紙幣を発行する中央銀行、

いずれも自らの採掘、鑄造、発行した貨幣が、商品と交換に市場に投ぜられた瞬間に、隠された一方的贈与、すなわち「余剰価値」を獲得する」というのである〔岩井 1985〕。

つまり紙幣、貨幣を発行する国家、君主は、それを発行するだけでモノ・労働力等がただで手に入れることができるということである。そして「商品交換の場は、それが貨幣を流通させている限り、その『はじめ』から、余剰価値創出という原罪を内に宿していたのである。したがって、不平等あるいは階級分化は、市場経済の『誕生』とともにあり、それがまさに市場経済を生まれながらにして『熱い社会』（レヴィー＝ストロース）にしているのである」のだという〔岩井 1985〕。

者米谷におきかえれば、河谷平野の生態的な環境を特定の、選択的に占有することが、すなわちコメや木綿の余剰価値の独占的な所有につながり、このことが貨幣を発行することと同様の結果をもたらすのではないかということである。

確かに者米谷の市システムにささえられた生業複合体は、生産物の相互依存と生業システムの相互補完という生業戦略を創出することで、多民族の共存を可能にしてきた。しかしこのシステムは同時に、河谷平野を占有する集団にとっては、モノを交換する場と機会も占有することになり、けっきょくは流通をも掌握することにつながる。そのことが者米谷の生業戦略の差異性を誘発し、市場メカニズムを生起させるとともに、階層化を創出してきた側面も有していたのではないか。

生業の差異性と交換が市システムを生み出す過程はけっして意識的におこなわれたのではない。者米谷の生態的な環境の差異性を各民族が利用するそのはじまりが、または特定の生態的な環境の選択と占有が、差異を生み出す市場メカニズムというシステムを宿していた。したがって不平等あるいは階層分化は、生態的な環境の差異性とともにあつたといえる。つまり者米谷にみいだされた利潤を生み出す市場メカニズムは、外在的な影響によって生起したのではなく、人びとがこの谷に住み利用しはじめたその時点で、その生起の要因がすでに生態的な環境の差異性のなかに埋め込まれていたといえる。

いいかえれば者米谷の生業複合体をささえてきた市場メカニズムとは、環境利用と別個に発生したシステムではない。むしろ多民族の共存を可能にした、地域の生計維持システムをささえるための大きなエスノ・サイエンスの一部だといえよう。

さて者米谷という生活世界は、特に 1970 年代以前は閉じられた自給自足的な小宇宙を形成し、市場メカニズムとは無縁であつた世界としてみることもできる。確かに 1970 年代以前の者米谷は、自動車を通れる道路もなく、馬を使って鉄や塩など、者米谷では生産できない商品の輸入や、藍、木綿布などごく限られた商品の輸出だけに頼っていた。そして 1980 年代以降、現在の者米谷でおこっているキャッサバ、レモングラス、そしてバナナ、パラゴムの木といった換金作物の導入という生業変化と市場経済化は、中国政府の開放政策や世界を席卷しつつある「資本主義経済」のグローバル化の影響によって促進されてきた。

者米谷の農民が競って栽培している換金作物は、者米谷で消費されているのではなく、外部の市場世界へと輸出される。その価格は外部世界の市場が決定しているため、変動も大きい。そのため栽培そのものが投機的な要素を含む。

者米谷が内生的に生起させてきた市場メカニズムは、農民同士が生業戦略の差異化と市システムから生業複合体を作りあげるなかで、意識するにせよしないにせよ相互に価値の差異性を創出した

がら価格の予想をおこなう投機家としてふるまうことで成立している。

生業複合体というシステムをささえている市場メカニズムを理解するには、地域を1つの生業体としてみる必要がある、その場合は生業の並列化と内部化、集約的農耕と非集約的農耕、生業経済と市場経済といった二項対立的な分類とは異なる視点が必要だろう。それは農民が生態的な環境の差異性を利用しながら、それを生産物＝商品の創出と差異性へと転換していることだろう。つまり差異の原理によって利潤を生み出すという、通底したシステムを考える必要があるように思える。

者米谷の市場メカニズムは、基本的には差異性という簡明直截な説明原理によって動いているととらえると、それは商人資本主義や産業資本主義、それにポスト産業資本主義の差異を利用した原理と、基本的には同じだといえる。岩井克人は3つ資本主義に通底する原理を「単に差異性から利潤を生み出すシステムにしかすぎない」[岩井1985, 1993, 1997, 2000, 2006]と考えた。者米谷の生業経済と市場経済に貫徹する原理は、生態的な環境の差異を人が利用し生業戦略に結びつけ、差異性を創出することで利潤に結びつけている。差異性が利潤を創出すと考えると、人類の歴史とともに古いという意味で「ノアの洪水以前」の商人資本主義よりも、資本主義はさらに歴史がさかのぼる可能性も視野にいれる必要があるだろう。

者米谷の場合は比較的狭い地域内で、河谷平野から山の斜面へという複雑な生態的な環境が存在し、各民族・村単位でそれぞれに異なった環境利用をおこなっている。つまり生態的な環境が非常に多様で、差異性を利用した市場メカニズムの生起と顕在化がおこりやすいという条件にある。しかしこうしたある地域内で生態的な環境の差異性を利用する状況は、何も者米谷だけの特殊な世界ではない。むしろ生態的な環境が多様であれば、その差異性を多様な生業戦略に転換していく方がむしろ一般的だといえる。かえって環境の差異性を人が利用することから利潤を生み出すシステムという簡明直截な原理のため、おそらく人類の歴史上、世界のあらゆる場所で繰り返し生起してきた可能性も考えられる。

それを生態的な環境の差異性と生業の差異性から生起し進展してきた、歴史的に最もさかのぼるという意味から、「生態資本主義」という段階を想定することも可能性の1つとして考えられるかもしれない。

けっきょくのところで、人は自然との関わりの中で生きてきた。生業、交換、市、そして利潤を生み出す市場メカニズムといった人が作りあげてきたシステムも、人と自然との関係性のなかでしか決定されないのだという思考が必要のように思える。さらにいうならば媒介と交換をぬきにして人間社会はありえないが、者米谷における生業複合体と市システムは、この世にあまねく存在している媒介の1つの形態であり、それは生態的な環境の差異性を利用しモノを交換することによって成りたっている。もしかすると生態的な環境の差異性を利用し交換をはじめたのが人であり、それが人間の本性といえるのかもしれない。

岩井克人のいう商業資本主義、産業資本主義、そしてポスト産業資本主義は、いずれも「差異の原理」によって利潤を生み出している。そして歴史的にみて、「これらの3つの資本主義は、資本主義のなかの3つのバリエーションにしかすぎず、現在でも商人資本主義もあれば産業資本主義もあるし、産業革命以降の200年間にも商人資本主義もあればポスト産業資本主義もあったし、産業革命以前にも産業資本主義もあればポスト産業資本主義もあったはず」だと主張する[岩井2006]。

者米谷の市における移動商人が、商品の価格の差を利用して利潤を得ているのは、商人資本主義といえるし、バナナ業者は者米谷の賃金労働と労働生産性の差異を利用して利潤をあげる産業資本主義だとみなすことができるだろう。そしてこれに農民が生態的な環境の差異を利用して利潤を生み出しており、それぞれの関係性のなかで者米谷独自の生業複合体と市場メカニズムを作りあげてきた。

つまり地域の生活世界を理解するには、ポランニーが主張した市場経済が歴史上極めて特殊な制度として社会から自立する経済に対して社会に埋め込まれた経済や、または都市と農村、国家の中心と辺境、現代のグローバル化しつつある社会と地域の共同体的社会といった、人びとの生活世界を二項対立的な構図で考えるのではない見方が必要であろう。

またこのような見方は、これまで述べてきた生態的な環境の差異を利用して利潤を生み出すという原理も、者米谷の生活世界を説明する1つの要素であり、このことで彼らの世界をすべて理解できるわけではないという思考にもつながる。

者米谷の生活世界は生態的な環境も複雑で、その上に多様な民族が複合することによって成りたっている。そこには市場メカニズムが影響を与えていることは確かなのだが、その上にそれぞれの民族の共同体的な慣習や文化的制約といった非経済的な要因をひきずっている。さらに歴史的な偶然性や、国家政策の強い影響や、個人の新たな生業戦略の試行などの絡み合いのなかでものごとが決定され、融合した生活世界を作りあげている。けっきょくのところ人間の生活世界は、さまざまな関係性の上に成りたっているという視点が必要なのだろう。

人間の生活世界は、生態的な環境だけが人間の行動を制約しているわけでもないし、また人間が常に自然界において中心的な存在だったこともない。環境利用、生業、そして、市場メカニズムは、1つのものが独立して存在しているのではなく、さらにこれらとりまく多様な要素のなかで、相互の関係性と絡み合いながらそれぞれが決定されている。生活世界を形成しているさまざまな要素の相互の関係性を理解することが、人間の社会や人間とは何かという根本的な問題を理解することにつながる。

者米谷の実例は、激動する中国の国家周辺で生きる人びとの生活世界とその未来について思索を誘うだけでなく、人間と自然的な環境との関係性を深く刻印しており、その豊かな個性から学ぶことこそが最も大切なことなのであろう。

註

(1)——以下の Murra および Burash の論文の概要は、大貫良夫の論文からの引用である。

(2)——ハニ族の村で聞き取り調査をおこなうと、タイ族が後からやってきて土地を奪ったという伝承をよく聞くことができる。反対に上新寨や巴義などタイ族の村で聞き取り調査をおこなうと、解放前まで山住のハニ族が食料をもとめて、タイ族の村を襲った話が残っている。者米谷の民族ごとの棲み分けが安定するまでには、おそらく争いの歴史があったと思われる。

(3)——調査地である初保村は毛陽鎮からおよそ 10km 東にいき、さらに南から流れ込むナムハ川をおよそ 2km 遡ったところにある。初保村は、五指山市毛陽鎮牙合行政村に属する自然村の一つである。牙合行政村は、初保を含む、什冲・方満・什好・便文の5つの村からなっている。初保村の戸数は現在 50 戸で、人口 246 人を数える。

(4)——1982 年にはじまった生産請負制以降、五指山市地域で調査をおこなった水満村、初保村、太平村、保

力村では、換金作物の導入、五指山市との関係性、観光 しくは篠原徹編『中国・海南島—焼畑農耕の終焉』東京
事業などによってその差異は非常に顕在化している。詳 大学出版会〔2004年〕を参照のこと。

参考文献

- 天野元之助 1940 「現代支那の市集と廟会」『東亞学』2
天野元之助 1953 『中国農業の諸問題（下）』技報堂
石井米雄 1975 「歴史と稲作」『タイ国—ひとつの稲作社会』石井米雄編、創文社
石原 潤 1987 『定期市の研究—機能と構造—』名古屋大学出版会
石原 潤 1998 「登封市域における都市及び農村の集贸市场」『河南省登封市の市場経済化と地域変容』（石原潤・孫尚倫編）
京都大学大学院文学研究科地理学教室
石原 潤 2000 「成都市東南部郊外における集市—G.W.Skinnerの調査地探訪—」『成都市とその近郊農村の変貌=成都市
と近郊 村の変貌』（石原潤・傅綬寧・秋山元秀編）、京都大学大学院文学部研究科地理学教室
石原 潤 2001 「綿陽市游仙地区農村部の集市」『内陸工業都市綿陽市と周辺農村の変容—内陸工 城市綿 市と周辺 村の
変容』（石原潤・傅綬寧・秋山元秀編）、京都大学大学院文学研究科地理学教室
石原 潤 2002 「西昌市城都市部及び農村部の集市」『四川省西昌市の発展—少数民族地域の都市と農村』（石原潤・傅綬寧・
秋山元秀編）、京都大学大学院文学研究科地理学教室
尹 紹亭 2000 『人と森林—生態人類学視野中的の刀耕火種』雲南教育出版社
尹 紹亭（白坂 蕃訳）2000 『雲南の焼畑—人類生態学的研究—』農林統計協会
伊谷純一郎 1980 「赤道アフリカの自然主義者たち」『季刊民族学』13
市川昌広 2000a 「サラワク州イバン村落における移動湿地田稲作の変遷」『東南アジア研究』東南アジア研究センター、38
巻1号
市川昌広 2000b 「サラワク州イバン村落における湿地田稲作—植付け方法にみる適応戦略—」『東南アジア研究』東南アジ
ア研究センター、38巻1号
市川昌広 2003 「サラワク州イバン村落の世帯にみる生業選択」『TOROPICS』12（3）
市川光雄 1997 「環境をめぐる生業経済と市場経済」『岩波講座文化人類学 第2巻 環境の人類史』岩波書店
伊藤貴子 2004 「都市近郊農村のマーケット依存性」『中国・海南島—焼畑農耕の終焉』東京大学出版会
稲村哲也 2007 「旧大陸の常識をくつがえすアンデス牧畜の特色」山本紀夫編『アンデス高地』山本紀夫編著、京都大学学術
出版会
今西錦司 1952 『村と人間』新評論社
岩井克人 1985 『ヴェニス商人の資本論』筑摩書房
岩井克人 1987 『不均衡動学の理論』岩波書店
岩井克人 1993 『貨幣論』筑摩書房
岩井克人 1997 『資本主義を語る』筑摩書房
岩井克人 2000 『二十一世紀の資本主義論』筑摩書房
岩井克人 2006 『資本主義から市民主義へ』新書館
卯田宗平 2004 「市場経済の浸透と商いの自立性」『中国・海南島—焼畑農耕の終焉』東京大学出版会
梅崎昌裕 2004 「環境保全と両立する生業」『中国・海南島—焼畑農耕の終焉』東京大学出版会
ウルフ、E（佐藤信行、黒田悦子訳）1972 『現代文化人類学1 農民』鹿島研究所出版会
雲南省志編纂委員会 2001 『雲南省志—地理志—』雲南人民出版社
雲南省金平苗族瑶族傣族自治州志編纂委員会 1994 『金平苗族瑶族傣族自治州志』三聯書店
雲南省緑春県志編纂委員会 1991 『緑春県志』雲南人民出版社
エンバーハルト、W 1942 『古代中国の地方文化』（白鳥芳郎監訳）六興出版
王 清華 1999 『棚田文化論—哈尼族の生態農業』雲南大学出版社
大津忠彦、常木見、西秋良宏 1997 『西アジアの考古学』同成社
大貫良夫 1978 「アンデス高地の環境利用—垂直統御をめぐる問題」『国立民族学博物館研究報告』3（4）、国立民族学博物
館
岡田 謙 1942 『海南島黎族の社会組織』出版社不明（2001年、クレス出版復刻版）
岡 政雄 1994 『岡政雄論文集 異人その他 他十二篇』岩波文庫、岩波書店

- 沖縄大学沖縄学生文化協会 1982 「那覇市第一牧志公設市場調査報告」『郷土』20号、沖縄大学
- 尾高邦夫 1942 『海南島黎族の社会組織』出版社不明(2001年、クレス出版復刻版)
- 郭文韜・曹隆恭・宋湛慶・馬孝劬 1989 『中国農業の伝統と現代』農山漁村文化協会
- 掛谷 誠 1974 「トングウェ族の生活維持機構—生活・生業・食生活」『季刊人類学』5(3)
- 掛谷 誠 1977 「トングウェ族の呪医の世界」『人類の自然誌』伊谷純一郎・原子冷三共編、雄山閣
- 掛谷 誠 1986 「伝統的農耕民の生活構造—トングウェ族を中心として」『自然社会の人類学—アフリカに生きる』伊谷純一郎・田中二郎共編、アカデミア出版界
- 掛谷 誠 1998 「焼畑農耕民の生き方」『アフリカ農業の諸問題』高村泰雄・重田真義編著、京都大学学術出版会
- 掛谷 誠 2002 「アフリカ農耕民研究と生態人類学」『講座・生態人類学3 アフリカ農耕民の世界—その在来性と変容』掛谷誠編著、京都大学学術出版界
- 加藤 繁 1936 「清代に於ける村鎮の定期市」『東洋学報』23-2
- ダニエルズ、C 1999 「少数民族の歴史をどうみるか—近年の研究紹介をかねて—」『アジア遊学』9号
- 黒田明伸 2003 『貨幣システムの世界史—(非対称性)をよむ』岩波書店
- 湖中真哉 2002 「生業牧畜と市場経済を結ぶ地域ネットワーク—ケニア中北部サンプルの家畜商の事例」『講座生態人類学4 遊牧民の世界』京都大学学術出版会
- 小松かおり 2002 「第一牧志公設市場のゆくえ—観光化による市場の変容—」『開発と環境の文化学—沖縄地域社会変動の諸契機—』松井健編、榕樹書林
- サーリンズ、M(山内昶訳) 1984 『石器時代の経済学』法政大学出版局
- サウワー、C・O(竹内常行ほか訳) 1952 『農耕の起源』古今書院
- 佐藤宏之 2004 『小国マタギ 共生の民族知』農山漁村文化協会
- 史 軍超 2002 「対元陽哈尼族梯田申報世界遺産的調査研究」『哈尼族文化論叢』雲南民族出版社
- 重田真義 2004 「エチオピア高地の定期市—コーヒーの葉とエンセーテを交換する」『山の世界』(梅棹忠夫・山本紀夫編)岩波書店
- 篠原 徹 1990 『自然と民俗—心意のなかの動植物—』日本エディタースクール出版部
- 篠原 徹 1995 『海と山の民俗自然誌』吉川弘文館
- 篠原 徹 2002 「エチオピア・コンソ社会における農耕の集約性」『講座・生態人類学3 アフリカ農耕民の世界—その在来性と変容』掛谷誠編著、京都大学学術出版界
- 篠原 徹編 2004 『中国・海南島—焼畑農耕の終焉』東京大学出版会
- 篠原 徹 2006 「棚田景観にみる歴史性と文化性の相違—中国・雲南省紅河州者米におけるタイ族・ヤオ族・アールー族—」『叢書「文化財保護制度の研究」文化的景観の成立、その変遷』第18回国際文化財保存修復研究会報告書、独立行政法人文化財研究所、東京文化財研究所国際文化財保存修復協力センター
- 謝 蘊秋・李 先緒 1999 『雲南境内の少数民族』民族出版社
- 蔣 宏偉 2004 「換金作物と貧困克服の試み」『中国・海南島—焼畑農耕の終焉』東京大学出版会
- スキナー、G.W.(今井清一・中村哲夫・原田良雄訳) 1979 『中国農村の市場・社会構造』法律文化社
- スチューベル、H(平野義太郎編・清水三男訳) 1943 『海南島民族誌—南支那民族研究への一寄與—』畝傍書房
- 高谷好一 1978 「水田の景観学的分類試案」『農耕の技術』農耕文化研究振興会
- 高谷好一 1985 『東南アジアの自然と土地利用』類草書房
- 高谷好一 1987 「アジア稲作の生態構造」『稲のアジア史』第1巻、小学館
- 田村善治郎・TEM 研究所 2003 『棚田の謎—千枚田はどうしてできたのか—』社団法人農山漁村文化協会
- 中国科学院民族研究所雲南民族調査組・雲南省民族研究所編
1963 『雲南省紅河哈尼族彝族自治州金平県苦聰人社会経済調査』(出版社不明)
- デュビイ他 1987 『西欧中世における都市と農村』九州大学出版会
- 刀 潔 2006 「金平河莽人社会文化調査」『雲南特有族群社会文化調査』(和少英編)、雲南大学出版社
- 刀 潔 2006 「者米苦聰人社会文化調査」『雲南特有族群社会文化調査』(和少英編)、雲南大学出版社
- 中島峰広 1999年 『日本の棚田—保全への取り組み—』古今書院
- 中村哲夫 1978 「清末華北の農村市場」野沢豊・田中正俊編『講座中国近現代史』二、東京大学出版会
- 西谷 大 2001a 「山地住民の生業における山の垂直利用とその変化—海南島省五指山市毛陽鎮初保村のリー族の事例—」『アジア・太平洋の環境・開発・文化3』日本学術振興会未来開拓大塚プロジェクト事務局
- 西谷 大 2001b 「家財道具調査」『アジア・太平洋の環境・開発・文化3』日本学術振興会未来開拓大塚プロジェクト事務局

-
- 西谷 大 2002a 「海南島リー族のネズミ捕獲弓」『動物考古学』18号
- 西谷 大 2002b 「大きな畏小さな畏—焼畑周辺をめぐる小動物狩猟—」『アジア・アフリカ言語研究所』第64号
- 西谷 大 2003a 「野生と栽培を結ぶ開かれた扉—焼畑周辺をめぐる植物利用からみた栽培化に関する一考察—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第105集, 国立歴史民俗博物館
- 西谷 大 2003b 「トリとネズミ—弾弓と鋏弓からみた焼畑をめぐる小動物との戦い—」『考古学研究室創設30周年記念論文集, 先史学・考古学論究Ⅳ』
- 西谷 大 2004a 「国家成立と周辺地域における自然利用の変容—アーキエスノロジー的方法による一考察—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第119集, 国立歴史民俗博物館
- 西谷 大 2004b 「自然環境の変化と生活適応戦略」『中国・海南島—焼畑農耕の終焉』東京大学出版会
- 西谷 大 2004c 「史書にみるリー族の生活世界」『中国・海南島—焼畑農耕の終焉』東京大学出版会
- 西谷 大 2005a 「大圈套与小圈套 围绕着火田展开的小型动物狩猎—」JOURNAL OF GUANGXI UNIVERSITY FOR NATIONALITIES (PHILOSOPHY AND SOCIAL SCIENCE EDITION) Vol.27 No.1
- 西谷 大 2005b 「市のたつ街—交易からみた多民族の交流—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第121集, 国立歴史民俗博物館
- 西谷 大 2005c 「雲南国境地帯の定期市—市の構造とその地域社会に与える影響—」『東洋文化研究所紀要』第147冊, 東京大学東洋文化研究所
- 西谷 大 2006a 「雲南国境地帯の棚田—アールー族とヤオ族の灌漑システム—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第125集, 国立歴史民俗博物館
- 西谷 大 2006b 「市はなぜたつのか—雲南国境地帯の定期市を事例として—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第130集, 国立歴史民俗博物館
- 西谷 大・刀潔 2006c 「中国の水田漁撈—黒タイ族のウケ漁—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第133集, 国立歴史民俗博物館
- 西谷 大 2006d 「魂は眠らない 中国・雲南省者米谷のタイ族の葬式」『SOGI』91号, 表現文化社
- 西谷 大 2006e 「中国・雲南省者米谷のタイ族の葬式 魂は眠らない2—激変する者米谷の生活世界」『SOGI』92号, 表現文化社
- 西谷 大 2006f 「中国・雲南省者米谷のタイ族の葬式 魂は眠らない3—精霊と魂の住む谷」『SOGI』93号, 表現文化社
- 西谷 大 2006g 「葬儀を楽しむ人々—海南島のリー族と雲南のタイ族」『歴博』No.138, (財) 歴史民俗博物館振興会
- 西谷 大 2007a 「灌漑システムからみた水田稲作の多様性—雲南国境地帯のタイ, アールー, ヤオ族の棚田を事例として」『国立歴史民俗博物館研究報告』第136集, 国立歴史民俗博物館
- 西谷 大 2007b 「市の誕生と都市化—生業経済の定期市から市場経済の市へ—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第136集, 国立歴史民俗博物館
- 西谷 大 2007c 「定住的水田と移動的水田—生業システムからみた多様な水田稲作の姿—」『弥生時代はどうかかわるか』(広瀬和雄編) 学生社
- 西谷 大 2007d 文部省科学研究補助金成果報告書(研究代表・篠原徹)『実践としてのエスノ・サイエンスと環境利用の持続性—中国における焼畑農耕の現在—』(第2部 雲南省金平県者米谷を執筆)
- 西谷 大 2007e 「雲南省紅河州者米谷における生業と市」『総合研究大学院大学 平成18年度特定研究経費事業 国際シンポジウム 地域社会の精算と経済—中国少数民族地帯の過去, 現在, 未来—』国立歴史民俗博物館
- 西谷 大 2008a 「土地利用と斜面畑からみた水田稲作の多様性—雲南省者米谷のタイ, ハニ, アールー, ヤオ, クーツォン族の生業戦略を事例として」『国立歴史民俗博物館研究報告』第139集, 国立歴史民俗博物館
- 西谷 大 2008b 「棚田の灌漑システムからみた水利用と環境利用の多様性—多民族が暮らす雲南国境地帯を事例として—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第145集, 国立歴史民俗博物館
- 西谷 大・篠原 徹 2005 「雲南省紅河州者米谷のアールー族とヤオ族の灌漑システム」『コモンズと生態史研究会報告書』文部科学省科学研究費補助金特定領域“資源人類学”
- 福井捷朗 1980 「サラワク低地の土地利用と未利用」『東南アジア研究』17巻4号
- 福井捷朗 1997 「エコロジーと技術—適応のかたち—」『稲のアジア史 普及版アジア稲作文化の生態基盤—技術とエコロジー』渡部忠世・福井捷朗編, 小学館
- 藤田弘夫 1993 『都市の論理—権力はなぜ都市を必要とするのか—』中公新書
- ボランニー, K (玉野井芳郎・栗本慎一朗訳) 1980 『人間の経済Ⅰ—市場社会の虚構性—』岩波書店
- ボランニー, K (玉野井芳郎・栗本慎一朗訳) 1980 『人間の経済Ⅱ—交易・貨幣および市場の出現—』岩波書店
-

-
- 増井経夫 1941 「広東の墟市」『東亜論叢』4
- 松井 健 1998 「文化学からの脱=構築—琉球弧からの視座—」榕樹書林
- マリノフスキー, B. デ・ラ・フェンテ, J 著 (信岡奈生訳, 黒田悦子解説)
1987 『市の人類学』平凡社
- 村松一弥 1973 『中国の少数民族—その歴史と文化及び現況—』毎日新聞社
- 百瀬邦泰 2003 「雲南の棚田地帯を涵養する雲霧帯の土地利用の変遷と竜山の消長」『アジア・アフリカ地域研究』第3号
- 森本芳樹 2005 『西欧中世形成期の農村と都市』岩波書店
- 安室 知 1998 『水田をめぐる民俗学的研究—日本稲作の展開と構造—』慶友社
- 安室 知 2005 『水田漁撈の研究—稲作と漁撈の複合生業—』慶友社
- 八幡一郎 1959 「魚伏籠」『民族学研究』23巻1・2号
- 山本紀夫 1980 「中央アンデス南部高地の環境利用」『国立民族学博物館研究報告』5(1), 国立民族学博物館
- 山本紀夫 1981 「アンデス地域, トトラの民族植物誌」『国立民族学博物館研究報告』5(4), 国立民族学博物館
- 山本紀夫 1982 「中央アンデス高地社会の食糧基盤」『季刊人類学』13(3)
- 山本紀夫 1983 「中央アンデスの根栽類加工法再考」『国立民族学博物館研究報告』7(4), 国立民族学博物館
- 山本紀夫 1988 「中央アンデスにおけるジャガイモ栽培と休閒」『農耕の技術』11
- 山本紀夫 2004 『ジャガイモとインカ帝国—文明を生んだ植物』東京大学出版会
- 山本紀夫 2007 「高地でも人が暮らす中央アンデス」『アンデス高地』山本紀夫編著, 京都大学学術出版会
- 山本紀夫 2007 「農牧複合民の暮らし—食糧の生産と消費を中心に」『アンデス高地』山本紀夫編著, 京都大学学術出版会
- 山本紀夫 2007 「中央アンデス根栽農耕文化論」『アンデス高地』山本紀夫編著, 京都大学学術出版会
- 山本紀夫 2007 「アンデスにおける高地文明の生態史観—ヒマラヤ・チベットとの比較」『アンデス高地』山本紀夫編著, 京都大学学術出版会
- 吉沢英成 1981 『貨幣と象徴』日本経済新聞社
- 吉田集而他 1998 「特集 人が大地に刻むもの—地域生態史の試み」『地位研究論集』Vol.1 No.2, 国立民族学博物館
- 雷 兵 2002 『哈尼族文化史』雲南民族出版社
- 羅 鈺 1996 『雲南物質文化—采集漁獵卷—』雲南教育出版社
- レッドフィールド, R (柴谷臣道・宮本勝 共訳) 1978 『未開世界の変貌』みすず書房
- 和 少英 2006 「金平傣族社会文化調査」『雲南特有族群社会文化調査』(和少英編), 雲南大学出版社
- 渡部忠世・桜井由躬雄編 1984 『中国江南の稲作文化—その学際的研究』日本放送出版会

(国立歴史民俗博物館研究部)

(2010年7月26日受付, 2010年10月9日審査終了)

Creation of a Market Mechanism in View of the Livelihood Complex in Zhemigu

NISHITANI Masaru

The livelihood system in Zhemigu is characterized by creating a livelihood complex. In this article, using actual cases in regions other than Zhemigu, we estimate under what conditions differences in livelihood strategy develop as well as the market mechanism created through people's daily utilization of the ecological environment.

In Zhemigu, three differences, that is, difference in ecological environment, difference in environmental utilization, and difference in livelihood strategies, and the municipal system are intertwined with each other to form a livelihood complex. The livelihood complex in Zhemigu has been supported by the municipal system and promoted through interaction.

The process through which differences in livelihood and exchange produced the municipal system was not intentionally created at all. The beginning of the use of ecological environmental differences by ethnic groups in Zhemigu or the selection and possession of a specific ecological environment involved a market mechanism system that produces differences. Therefore, it can be said that inequality or hierarchial differentiation coexisted with differences in the ecological environment. In other words, the market mechanism that produces the profits found in Zhemigu was not created by extrinsic influences, but the factors leading to its creation already included differences in the ecological environment at the time that people started living in this valley and exploiting its resources.

Key words: livelihood strategy, livelihood complex, market system, logic of differences, market mechanism